

著書紹介

村上祐紀著『森鷗外の歴史地図』

堀下 翔

明治四五年七月三〇日、天皇薨去。元号が大正へ遷った九月一日に明治天皇の大葬が行われ、この夜、陸軍大将乃木希典が自刃した。先帝薨去を受けた殉死であった。この事件の報に接した鷗外はつかぬ期間で書き上げたのが「興津弥五右衛門の遺書」である。

これに続き鷗外は「阿部一族」（中央公論 大正二年一月号）を発表。以後の創作活動において、いわゆる「歴史小説」に注力するようになった。一方これに続く時期の著述として大正五年一月から同五月まで「東京日日新聞」および「大阪毎日新聞」に連載された『江抽斎』を嚆矢とするいわゆる「史伝」の作品群が存在する。

歴史を扱ったこれらの諸作の位相については従来、歴史叙述に関する創作理念を開陳した「歴史其儘と歴史離れ」（「心の花」大正四年一月号）という短文を補助線とし、同文章の執筆時期を境界としていわゆる「歴史小説」と「史伝」とを区別して論じることが一般的であった。加うるに、一連の歴史叙述をなした時期の鷗外は、長く務めた陸軍軍医の立場を退き（大正五年）、宮内省の帝室博物館総長兼図書頭に就任しており（大正六年）、ここに「文学」と「政治」、ないしは「文学者」と「公人」という対立的二項を見出すのが研究史の主流であった。

このたび刊行された村上祐紀『森鷗外の歴史地図』において重要

視すべきなのは、鷗外の諸作品をめぐる上記のごとき様相にあって、「歴史小説」と「史伝」といったジャンルによる作品の峻別や、「文学」と「政治」といった二項対立による人物像の腑分けを、おおむね放棄している点である。村上は同書中において、それらをむしろ一体のものとして理解すべく、鷗外の歴史叙述を、鷗外その人に対して属人的に定義されるジャンル論の埒外に置き、まさに歴史叙述のまま、同時代の史学や歴史言説に照らして読解しようと試みているのだ。近代の知識人としてのさまざまな体験が緊密に絡みあう鷗外という作家を研究するに際して、きわめて重要な問題設定といえよう。

同書の構成は以下の通り。

序章 近代史学の歴史地図

第I部 歴史を語る

第一章 探墓の歴史

第二章 歴史叙述の実験

第三章 「立証」と「創造力」

第II部 歴史を綴る

第一章 鷗外と外崎寛

第二章 集古会から見る『渋江抽斎』

第三章 好古と考古

第三部 歴史を創る

第一章 接続する「神話」

第二章 帝室博物館総長としての鷗外

第三章 「皇族」を書く

いずれの章も作品・史料を読解するプロセスを経る各論となっているが、その性質や論の進め方によって三部立に構成されている。「歴史を語る」「歴史を綴る」「歴史を創る」というそれぞれの部立を通して、歴史に対する鷗外の意欲的とも見える関心は、多面的に照射され、布置されてゆく。それぞれの部立がいずれも、叙述が行われる際の動的なありように注目して名付けられているのは、テキストの生起する成因やそれが表出するにいたる過程を重視するという著者の分析手法のあらわれといえるだろう。

第一部「歴史を語る」で取り沙汰されるのは、鷗外が作品執筆を重ねる中で模索された歴史叙述の方法論である。『渋江抽斎』および、それに先行して執筆された「津下四郎左衛門」「相原品」が検証の対象となる。

第二部「歴史を綴る」では、同時代の史学関係者と鷗外との間に生じていた影響関係から『渋江抽斎』『伊沢蘭軒』が論じられる。大正期、史学家や好古家の界限で「鳥八白」（福島・仙台の墓碑上部に残る未詳の文字）の論争が生じるに際し、鷗外は「鳥八白の解釈」という自説開陳の一文を「考古学雑誌」に寄稿していた。村上はこ

の事実に着目し、『渋江抽斎』や『伊沢蘭軒』にしばしば情報提供者たちの存在が書き込まれることの意味を探ってゆく。

第三部「歴史を創る」は、帝室博物館総長兼図書頭という公人の立場からなされた叙述や業績を主として取り上げる。宮内省図書寮の事業であった『天皇皇族実録』や、鷗外筆と推定される近年の新史料「上野公園ノ法律上ノ性質」、また、一連の歴史叙述に先んずる時期（明治四一年）に陸軍省の依頼によってなった『能久親王事蹟』などが分析対象として選択されているが、これらのテキストは従来、公人としての、あるいは頼まれ仕事としての叙述や業績のみなされ、文学作品とは区別されてきたものである。

なお同書は二〇一〇年に筑波大学大学院人文社会科学研究所へ提出された博士論文『森鷗外の歴史叙述』をベースとして編まれた（当該博士論文については本誌第三十六集（二〇一一年発行）に福山恵理が紹介している）。ただし博士論文以降の論文が加わるなど大幅な増補があり、特に第三部「歴史を創る」は三章すべてが書籍化に当たった増補部分となっている。

博士論文の時点では「歴史叙述」であった表題が「歴史地図」に変化している点を云々するのは野暮ではあるまい。ともすれば融通無碍な言葉遣いとも取れる「歴史地図」という洒落な表題は、しかしこの場合、「あとがき」で〈史伝〉「天皇皇族実録」「帝室博物館総長」といった當為を総体的に捉えたいという意図と自註される通り、ジャンル論の埒外にある同書の問題意識を体現しているものなのだ。

（二〇一八年二月二十六日 翰林書房 一三九頁 二八〇〇円＋税）